

研修Ⅰ B 「若い教師のための基礎・基本講座① 国語科授業のファーストステップ」  
説明的文章編「題名、段落、要約について」

<説明的文章を通して、育てたい言葉の力>

- ① 筆者が伝えたいことを理解し意味付ける力
- ② 筆者の書きぶり（図や表、挿絵も含む）に、自分の考えをもつ力
- ③ 筆者の伝えたいことに、自分の考え（感想や意見などを含む）をもつ力

低学年では、「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」を通して①の力を、中学年では、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと」を通して①及び②の力を、高学年では、「目的に応じて、文章の内容を的確におさえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること」を通して①②③の力を育てることが大切である。

<題名・段落・要約から>

6年間において言葉の力を育むための説明的文章の教材研究について、1年「いろいろなふね」と3年「もうどう犬の訓練」から具体的な例を挙げる。

○題名から

まず、教材文を一読後、題名の前後に言葉を付け加え、子どもが主体的に読みたいくなる方法を考えた。

例 A 「いろいろなふね」○○○○○○○

B ○○○○○○「いろいろなふね」

低学年では、Aのように「いろいろなふねのおはなし」や「いろいろなふねのきやくせん」とすることで、「時間的な順序や事柄の順序を考えながら大体を読むこと」につなげられるようにする。既習教材として扱うものとして中学年以降では、Bのように「役目に合うようにつくられたいろいろなふね」のような表現を心がけ、目的に応じて中心となる語や文を捉えて段落相互の関係や事実と意見との関係を考えて読むことにつなげていく。「もうどう犬の訓練」についても同様に扱い、主体的な読みにつなげられるようにする。

○段落から

まず、形式段落ごとに段落番号をつけ、「はじめ（話題提示）—中（説明）—終わり（まとめ）」に分ける。次に、文章構成図で「中」の部分をさらに細分化することによって、段落相互の具体的な関係性を表す。これにより、筆者の書きぶりが見えてくる。低学年の「読むこと」の指導事項「イ時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」につながってくる。具体的には、子どもたちに身近な船の順に提示されていることや、「役目」「つくり」「できること」の順で「おおまか→より部分」という書きぶりがされていること、それが4つの例を通して繰り返されていることに注目していくことが望まれる。このような説明的文章に対する見方・考え方をもつことで①の「筆者が伝えた

いことを理解し意味付ける力」を育みたい。

#### ○要約から

まず、形式段落ごとに段落番号を付け、「はじめ—中—終わり」に分ける。次に、文章構成図で「中」の部分をもさらに細分化することによって、具体的な関係性を表し各意味段落に見出しを付ける。（見出しを考える際は、要点から考える。）

「要点」とは、形式段落を短くまとめたものである。

「要点のまとめ方」は、

- ① 形式段落の中で一番大切な一文を見つける。
- ② その文の中で、題名に関係のある言葉や繰り返し使われている言葉（主語などにも注目）を一番後ろに置き、体言止めにする。

「要約する」とは、「大事な言葉や文を見つけられること」（要点指導）を通して、「大事な言葉や文を使いながら、内容を短くまとめる」（要約指導）ことであり、「要点をまとめること」は、要約することにつながる。

要約の仕方は、目的によって変わってくる。特に目的に合った字数を考えて書くことが大切である。（このことは、言語活動の設定にも関わってくる。）また、要点をもとに要約することで、子どもたちにとっても友だちの要約の評価がしやすく、交流したときにも妥当かどうかの判断が付きやすい。目的によっては、文章全体を要約するときもある。その際も、要点から意味段落の要約、文章全体の要約という手順も子どもたちにとっては、生かしやすい方法である。目的や対象学年に応じて、教材研究の方法や学習の手順を、柔軟に設定していくことが大切である。